

はじめに

当調査部は昨年度にひきつづき、今年4月21日より石神遺跡第2次発掘調査に着手した。発掘面積は約1200 m^2 である。調査は現在継続中で不確定な点があり、今後調査の進展によっては変更・追加もありうる。

石神遺跡は高市郡明日香村飛鳥字石神に所在し、昨年度調査した南の水田からは、明治35年秋、現在飛鳥資料館に展示されている「須弥山石」「石人像」が出土した。昭和11年春には、この石像物出土地点の性格を探るために、石田茂作氏等によって部分的な発掘調査が行なわれた。その結果、出土地点をめぐる石組の溝と東へ延びる石敷遺構とが確認され、「須弥山石」「石人像」が石組の溝をめぐる一種の噴水施設で、石神遺跡は甘藷丘を借景とした饗宴場としての性格をもち、斉明紀の記事に対応する遺構と推定された。

一方、飛鳥寺の北、雷丘の東方一帯の水田地帯を天武天皇の飛鳥浄御原宮に比定する説が、明治45年喜田貞吉によって提起され、昭和4年頃に発掘された旧飛鳥小学校付近の石敷遺構と、石神遺跡をも含めたその石敷のひろがりには、飛鳥浄御原宮推定地のひとつの根拠となってきた。また、飛鳥寺の発掘の成果により、「須弥山石」「石人像」の出土地点は飛鳥寺寺域の北西隅に近接し、飛鳥寺西門の西を通ると考えられる中道の延長上に位置することが明らかとなり、石神遺跡は飛鳥京の地割を考える上でもきわめて重要となった。以上のような研究史を踏まえ、石神遺跡における7世紀代の遺構を究明すべく、昨年度の第1次調査が実施された。その結果、1) 「須弥山石」の出土地点は本来石造物が据えられた場所ではないが、原位置がさほど遠方であったとは考えにくいこと、2) 7世紀代の遺構には前後2時期あり、従来一体として扱われていた石組溝と石敷とは、前者廃絶後に後者が敷設されており、前者は7世紀中葉頃、後者は7世紀後半頃に位置づけられること、3) 石敷は石組溝を埋め整地した後に敷設され、東端は西に面をそろえた石列で区切り、その東は一段高くなっている。また、南は東西棟とその東にとりつく東西塀によって区画されている、などの諸点が明らかにされた。今回の第2次調査は第1次調査区に北接する水田で、遺構の

北への広がり状況の究明が当面の課題となった。

調査成果

本調査で検出した遺構には、I) 7世紀代の遺構、II) 6世紀以前の遺構、III) 14～15世紀を中心とした7世紀以降の遺構、がある。

I) 当面問題となる7世紀代の遺構は、特に調査区の北と西では、中世の遺構によって大きく攪乱され、その検出は困難をきわめた。しかし、大きくは7世紀前半～中葉の遺構と7世紀後半の遺構とが重複するという昨年度の調査成果を再確認するとともに、いくつかの新知見を補足することができた。

7世紀前半～中葉の遺構としては、昨年度検出した南北石組溝SD135の北延長部分(石組溝A・B)のほか、調査区西北隅で石組溝C、北端で東西に走る素掘り溝D、西端近くで南北に走る素掘り溝E、東端で南北塀A、中央で礎敷Aなどを検出した。石組溝A・Bは巾1.3m前後、深さ1m前後で、人頭大あるいはさらに大形の石を3～4段に積んでいる。第1次調査区の南端で北折した石組溝A(SD135)は約60m北上し、ゆるやかにカーブを描いて東折し、石組溝Bとなり18m行ってさらに東へ延びている。石組溝Cは中世に著しい攪乱を受けているが、底に石を敷いた巾40cm前後の溝で、北からゆるやかに蛇行して西へ延びる。素掘り溝Dの西部分は不明であるが、巾30cm前後で石組溝Bのすぐ北を併行して走る。溝内からは7世紀中葉頃の土器が多数出土した。素掘り溝Eは石組溝Aの西1.5mを南北に貫流する。素掘り溝Dの廃絶後に機能している。南北塀Aは中世の土壌で中央部分を欠くが、12間分を検出しさらに南北に延びる。ただし、北部分と南部分とでは柱間が不均等なので、南部分を東へのびる掘立柱建物、北部分をその西柱筋にとりつく塀と考えることもできる。この柱筋は、飛鳥寺西限の大垣の筋にはほぼ一致する。礎敷Aは後述の石敷Bの下層にある。上面は凹凸がはげしいが部分的に西あるいは東、南に面をそろえて石を並べている。

7世紀後半の遺構としては、昨年度検出した石敷B(SX127)およびその東を囲する石列A(SX128)の北延長部分がある。石列Aは調査区中央付近で石組溝Fとなり、さらに

北へ延びて石組溝Bの南に達する。石列A以東は一段高くなり平坦面が広がるが、ここに掘立柱建物が存在した痕跡はない。石敷Bの北限及び西限は確認できなかった。

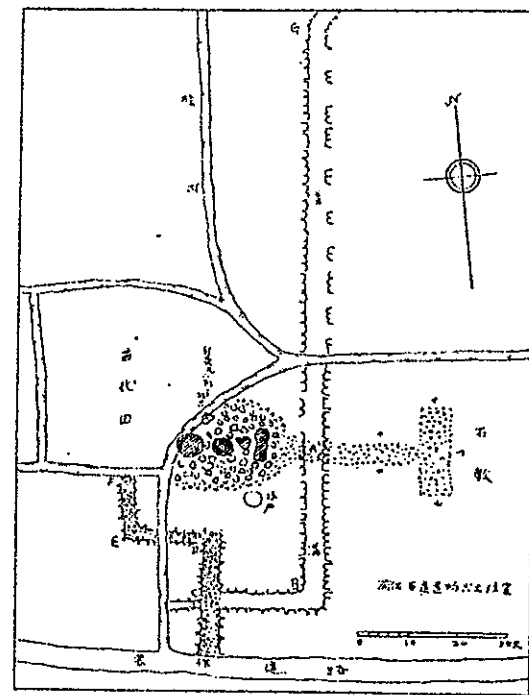
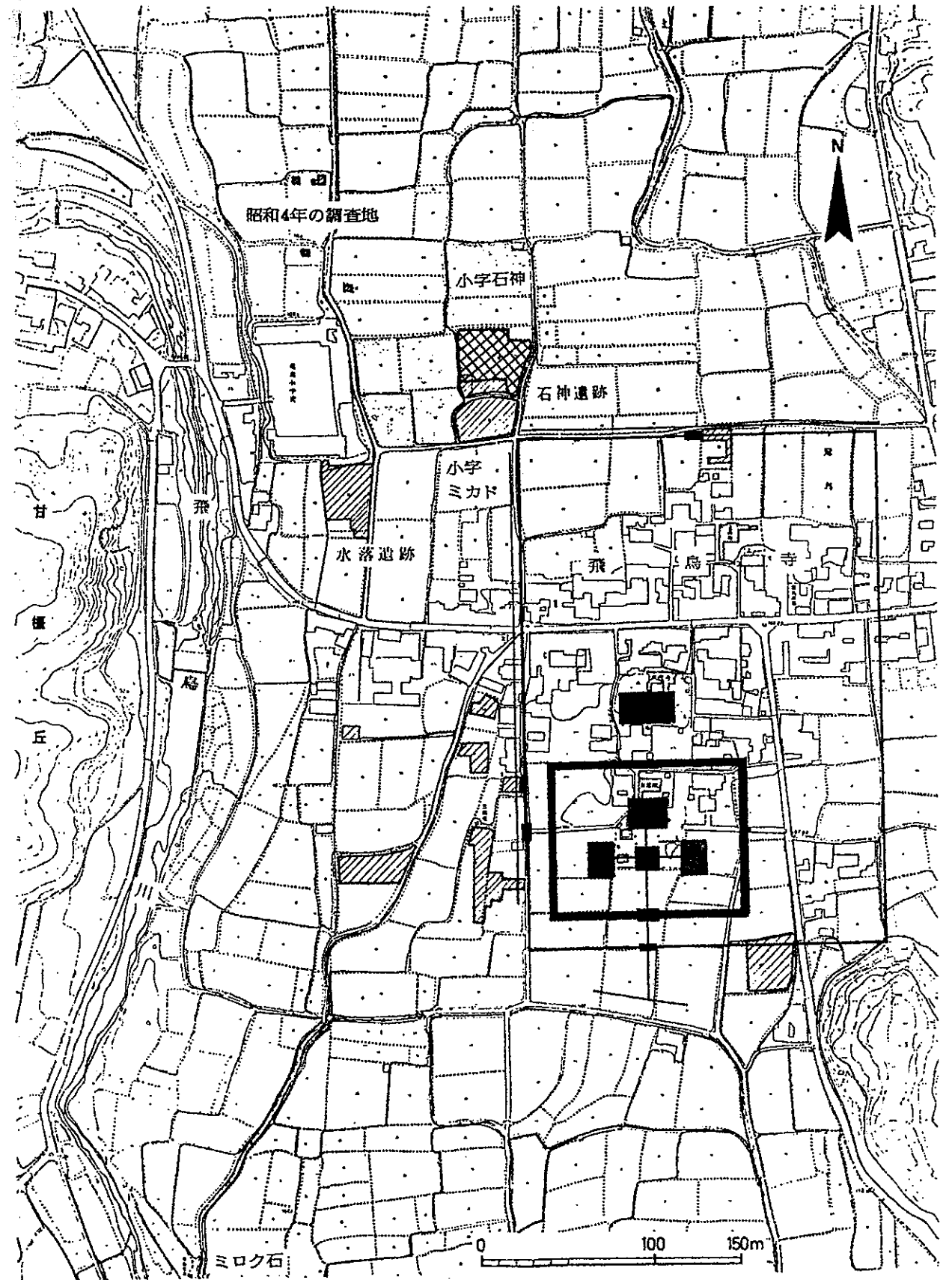
Ⅱ) 6世紀以前の遺構としては、弥生時代の土壌群および古墳時代の斜行溝、土壌などがある。

Ⅲ) 中世の遺構としては、多数のピット、土壌、溝のほか、一辺3m前後の方形の堅穴内に石室様の石組を施したものの3基、大きな長方形土壌内にバラスを詰めこんだものなどがある。

まとめ

中世の攪乱のため7世紀代の遺構については不分明な点が多い。しかし、7世紀中葉を中心とした遺構に関しては、石組溝Aが東折して石組溝Bとなることが明らかになった。この溝は7世紀代の石組溝としてはきわめて大規模で、しかもほぼ東西南北に計画的に設置されている。当地域の主要な用・排水路の機能を果たしていたと推定される。また、石組溝Bの方向は地形に逆らい、何らかの地割に規制されていることを思わせる。石組溝Cの存在は昭和11年および昨年度の調査成果を考え合わせると、当調査地の西方に「饗宴の場」の主体を推定させる。

7世紀後半には石組溝Aが廃絶し、石敷による平坦地が形成される。南限は昨年度の調査で確認されているが、その広がりについては今後の課題である。



齊明三年(六五七)七月一五日

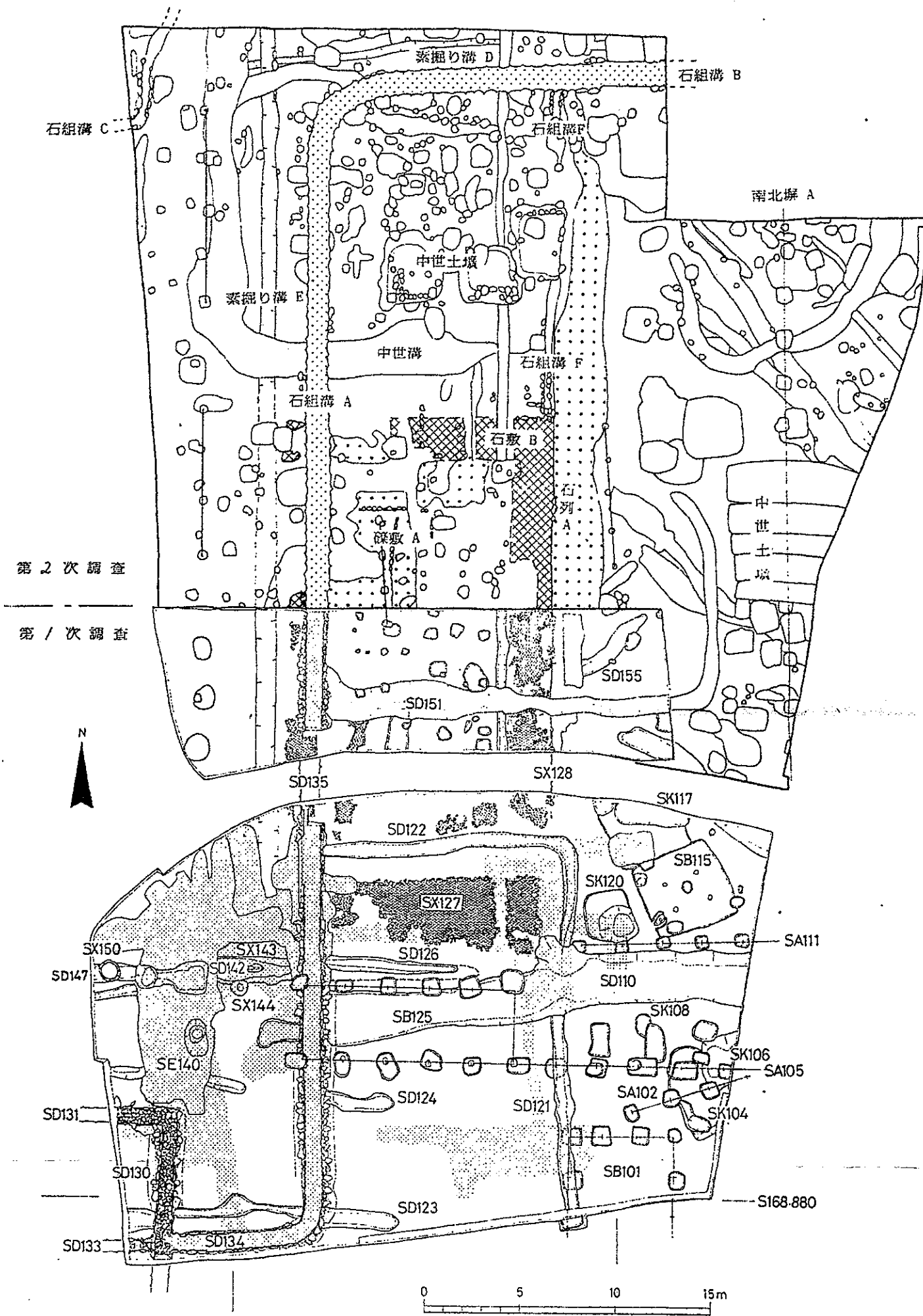
須彌山の像を飛鳥寺の西に作る。且、孟蘭盆會設く。暮に親貨選人に饗たまふ。

齊明五年(六五九)三月一七日

甘藷丘の東の川上に、須彌山を造りて、陸奥と越との蝦夷に饗たまふ。

齊明六年(六六〇)五月

又、皇太子、初めて漏刻を造る。民をして時を知らしむ。又、阿倍引田臣、名を賜せり。夷五十餘獻る。又、石上池の邊に、須彌山を作る。高さ廟塔の如し。以て齋僧四十七人に饗たまふ。



石神遺跡遺構配置図